

## 虐殺されたソ連世界語者達

### Pri mortigitaj Sovetaj Esperantistoj

Teruhiro SASAKI

佐々木照央 (2008年10月25日八ヶ岳館での報告)

現在、ロシア文学の研究にはエスペラント語の翻訳を参照することが必須となっている、と私は書いた。事実、見事な訳でロシア文学の古典の代表作が読める。プーシキン、ゴーゴリ、レールモントフ、ドストエフスキイ、トルストイ、チャーホフ、その他、多くの傑作が既にエスペラント化され、これからもその蓄積はますます豊かに成っていくであろう。今年の冬学期にはレールモントフの講義でエスペラント訳『現代の英雄』を学生に配布している。

以前、プーシキンの『エヴゲーニイ・オネーギン』エスペラント訳について論文を書いた時、参考にした文献の一つにネクラーフ訳がある[文献④]。これは栗栖継先生から私に寄贈された本である。このニコライ・ヴラヂーミロヴィチ・ネクラーフは1937年・38年のスターリンによる大粛清に遭遇、極東に流刑されて死亡した。オネーギン訳は彼の遺作である。肉体は抹殺された。しかし、彼の精神はこの翻訳によって、時代と場所を越えて、まさに時空を越えて私の眼前に訪れてくれた。非業の死を遂げても、作品は生き続け、読者を励ます。

スターリン統治下のソ連エスペラント界を率いた人々は苛酷な弾圧の下で、あるいは無惨に銃殺され、あるいは収容所に送られた。しかしながら、彼らの作品はしっかりと今に残り、必読の書であり続けている。最高指導者であった、エルネスト・ヴィルヘルム・カルロヴィチ・ドレーゼン(1892-1937)しかり、ヴラヂーミル・ヴァレンチーノヴィチ・ヴァランキン(1902-1938)しかり、エヴゲーニイ・ミハルスキイ(1897-1937)しかり。

彼らは後に名誉回復されたが、不当に生命を奪われてから名誉回復というのも虚しいかぎりだ。彼等を死に追いやった体制が脆くも崩壊したのは当然である。彼らの遺作を読むたびに、こんな才能豊かな人材をいとも簡単に殺害する権力へのやるせない憤りが湧いて来る。日本でも大杉栄や小林多喜二が虐殺されたが、スターリン体制下のそれは規模がひどすぎる。

しかし、虐殺を越えて遺作は生き残る。虐殺した権力よりもはるかに長く。『アンネの日記』もそうだが、ペンで書かれたものは斧で抹殺できない。万軍を備え完全武装した権力に対しても対等以上に闘い続ける。暴虐、圧制に対する最も強い抵抗は書かれた「作品」である。ネクラーフは翻訳、ドレーゼンは言語論と歴史記述、ヴァランキンは文学作品、ミハルスキイは詩を世に残した。

ネクラーフは1900年に生まれ、1915年にエスペランチストに成った。1918—19年に全ロシア青年エスペランチスト連盟議長、雑誌『若い世界』の編集長であった。彼の分

野はエスペラント文学の歴史と批評、プロレタリア・エスペラント運動の理論家（イデオログ）である。後に『オネーギン』の他に、ブロークやマヤコフスキイの詩のエスペラント訳を手がけた。

ヴァランキンは1902年生まれ、1920-21年にネージニイ・ノヴゴロドで労働者エスペラント協会の会長、そこで発行された雑誌『赤色エスペランチスト』の編集長であった。『メトロポリテノ（地下鉄）』という傑作を残した。

ドレーゼンは1892年ラトヴィア生まれ、1910年にエスペランチストとなり、ペトログラード工業大学を卒業した。1918-21年赤軍に従軍、1918年からロシア共産党員となった。1921年からは全ロシア中央執行委員会の機関でクレムリンの中で勤務した。

ミハルスキイは1897年ウクライナのレティチェフ市生まれ、革命後1918年から『自由な流れ』誌、や『ヴォルガの開拓者』誌を発行、エスペラントで詩作を続け、ロシアのSATでプロレタリア・エスペラント運動に献身した。彼は1931年末創立の国際革命エスペラント作家同盟（IAREV）を支え、『ラ・ノヴァ・エターボ』、『プロレータ・リテラトゥーロ』、『インテルナツィーア・リテラトゥーロ』を発行した。彼はIAREVの書記長、副会長はクジミッチとイズグールであった〔⑥148〕。

1921年6月第3回全ロシアエスペランチスト大会が開催され、国内百グループ代表160人の代議員が参加。6月4日に「ソ連国エスペランチスト同盟」SEUが結成された。（ソ連邦自体ができるのはその後1922年12月30日のことである。）ネクラーフはドレーゼン、ヴァランキンらとともに同盟の指導部に選ばれた。そしてクレムリンに勤務するドレーゼンが同盟の中央委員会議長に選ばれた。ネクラーフは1922年6月から発行される「新時代 La Nova Epoko」を作り、外国のエスペランチストとの交流を計った。

ドレーゼンは1926-30年、教職の道にも進み、コミュニケーション大学学長、モスクワ大学教授を歴任、全ソ対外文化関係協会幹部であった。彼はエスペラント運動史、国際言語論、などについて50点の著作がある。

1922年8月SAT代表ランティがモスクワを訪問し、ドレーゼン、ネクラーフらと会談した。SATに無政府主義者や社会民主主義者がいることで、ソ連共産党の当時の路線では相容れないものであったが、ソ連国内のSATのメンバーからの会員費徴収をドレーゼンの組織が引き受けるという合意はできた。1922年11月からコミンテルンの路線が「統一戦線」形成へと転換してから、SATとの関係はより緊密になっていった。1923年ドイツのカッセルでの第3回SAT大会にはドレーゼン、ネクラーフも参加した。SAT機関紙『Sennaciulo』での文通欄はソ連エスペランチスト達も積極的に活用し、世界のプロレタリアとの文通拡大へと発展した。（しかし、後の粛清はこの文通をスパイ罪とした。）エスペラントは世界の情報を文通によって収集、ソ連の国内情報を発信する重要な手段として一時公認された。

1927年革命十周年ではSEUに諸外国のエスペランチスト招待の権利が与えられ、日本からも参加した。

しかし、1927年から党内闘争が激化、スターリンの一国社会主義をめぐって分裂し、世界革命派のトロツキーにはじまり、カーメネフ、ジノヴィエフ、ブハーリンらの排除へと突き進んでいく。「右翼」、「左翼」、「人民の敵」「トロツキスト」等々、虚妄のレッテル貼りによる反対派排除が開始される。「社会主義建設期の階級闘争先鋭化」というスローガンの下、スターリンは反対派を弾圧していく。このスローガンは近親憎悪の正当化として機能し、かつての革命の同志の虐殺につながった。

1928年スウェーデンでのSAT第8回大会ではドレーゼンはこの党内状況を受けて、ランティが階級闘争を避けているというかのようなSAT批判をせざるを得なかった。1929年4月第一次五カ年計画が採択された。ドレーゼンの発言はこれに配慮し、「階級闘争先鋭化論」を用いてランティ「日和見主義」批判を続けた[①49]。ネクラーフも『無国家主義と国際主義』と題する本を書き、SAT批判を展開した。1932年8月にはSATとは別組織のIPE (Internacio de Proleta Esperantistaro)が誕生した。不思議にもこのIPEの外国部は1939年8月まで存続する。この時期のドレーゼン、ネクラーフらのランティ批判は不当かつ悲劇的である。彼らもまたスターリン体制に妥協して、エスペラント運動に分裂をもたらしたのである。しかし、1927年以降50年間のソ連代表たちは皆、スターリン体制で歪められた意見を国際舞台で発表せざるを得なかった、といていい。彼らの国際舞台での政治的発言はほとんど無意味なものとして、彼らの業績を見る必要がある。

1934年12月1日のキーロフ暗殺事件を契機に大粛清が開始された。当時の公式発表によれば、犯人はトロツキスト学生ニコラーエフで、海外からの指令で動いていた陰謀組織「合同センター」のメンバーとされていた。粛清の担い手は新設の「内務人民委員部」NKVD、1934年の夏「偉大な祖国の息子たち」という愛国的言葉が宣伝された直後にゲー・ペー・ウーが解散されて、代わりに設立された。「合同センター」にはトロツキストとジノヴィエフ派がひっくるめられる。これに関連してジノヴィエフ、カーメネフが1936年8月24日死刑宣告され、翌日執行された。内務人民委員部発表によれば、トロツキー、ジノヴィエフ派の「合同センター」と並行して、別の陰謀組織「トロツキスト・センター」がモスクワにつくられ、ドイツ及び日本と秘密交渉を行い、トロツキスト政府が樹立した暁には、ウクライナをドイツに、黒龍江流域を日本に割譲する密約を結んだとされる。その行動目標は、ソ連国内スパイ網、破壊工作網、反逆組織形成にあった、と内部人民委員部は発表し、これを粛清の口実にした。

1935年全ソ連邦共産党(ボリシェヴィキ)中央委員会にSEU調査委員会が設置された。1936年末37年初めに委員会結論が下される。ドレーゼン、ネクラーフ、ヴァランキンその他は「ソ連邦エスペランチスト同盟中央委員会の看板の下に活動するスパイ組織のメンバー」とされたのである。

1935年、外国との文通は個人的には禁止され、集団での文通が許可された。また紙の供給もSEUへは滞る。ただSEUのメンバーは11月15日の数字では13500人と増えていた[①72]。レニングラードでは月10-15回のラジオ放送までであった。1929年にライブツィヒ

で設立された「プロレタリアエスペラント通信」PEK 支部を通じての文通も継続していた。

1936 年 8 月 ドレーゼンは SEU 中央委員会総書記の地位を降りた。時あたかもスタハーノフ運動の最中で、エスペラント組織の積極的活動が要求されていた。しかし、紙が無いのに出版、文通に制約があるのに国際的呼びかけ、など容易ではない。手かせ足かせで、活動不足を批判される、という状況であった。エスペランチスト達に要求された国際協力の努力の向け先は、スペイン内乱における反ファシスト闘争支援であった。連帯支援の集団通信手紙、支援物資送付、ソ連国内へのスペイン事情報告、などがその活動内容であった。バルセロナにはエスペランチスト部隊も結成された。

1936 年スターリン憲法制定。その年の 8 月 25 日に「ソヴェートエスペラント界における秩序導入」が SEU 中央委員会会議で決定され、それに基づき 11 月 12 日にコルチンスキイ、イズグールの除名が始まった。12 月にはメンバーに対して報告が求められた。それは文通の実態調査であった。

「誰とエスペラント語で文通したか、国名、通信相手の短い身上書と住所、職業、言語能力の段階、興味関心 (PEK 作業の為に必要)」 [①85-86]

この後により詳しい調査内容、文通の性格、送付と受け取り数、知人エスペランチスト名、等々の報告が要求された。これはスペインでのエスペランチスト達の闘いを支援するソ連エスペランチストの支援活動の盛り上がりをもソ連当局が警戒しはじめたことを意味する。

「外国への書簡において特に注意すべき点は、ソ連憲法の諸条項にそってその実現が諸地域の具体的事実によって確認すること、及び反ソ的トロツキストセンターの経過を解明すること、つまり、ファシズムへの奉仕と帝国主義世界戦争へのトロツキー主義の役割を暴き出すこと、である。」 [①90]

スターリン統治下ソ連当局はスペインでのエスペランチストの活動に、トロツキストの存在を疑っている。

1937 年はエスペラント誕生 50 周年記念の年であった。その年がソ連におけるエスペラント弾圧の年となった。1937 年 3 月 16 日ミハルスキイが逮捕された。当初、罪状は『「センナツィウーロ」誌を一般のエスペランチストたちに配布した』、ということであったが、5 月には「ミハルスキイは反革命組織の指導者で、IAREV はトロツキストの反ソ作業の仮面である」、となった。彼は否定したが、拷問の結果、それを全面的に認め、自分をトロツキスト組織に引き入れたのはヴィクトル・コルチンスキイであると「自白」した [③23]。また、クジミッチの「自白」(1937 年 6 月 21 日) では、トロツキスト組織には、ミハルスキイ、イズグール、ドレーゼン、ネクラーフ、インツェルトフ (栗栖継氏の文通相手)、ポリーフ、ホフローフなどの名前が挙げられた。そのクジミッチ証言は次のようであった。

「エスペランチスト達、特にネクラーフとホフローフ (モスクワ)、ウクライナのポリーフ、のトロツキスト組織は、ドレーゼン (モスクワ) の承認と同意の下に反革命の目的に利用された。IAREV は外国のトロツキスト・センター及び外国在住のトロツキスト・

SAT メンバー達との連絡のための合法的チャンネルの一つとして利用された。…ドレーゼンは、外国の諸トロツキスト組織との連絡方法として、PEK（プロレタリア・エスペラント文通）の仮面の下でのエスペラント文通網を指導した。ドレーゼンの指令は我々の組織の活動において我々の組織員であるミハルスキイとボリーソフに影響を及ぼした。私の知るところでは、彼らはハンガリーのブルジョワ作家グループ、特に『文学世界』誌のファシスト、カローチャイ博士と結託していた。…我が組織のメンバーミハルスキイとフランスのトロツキスト・ブルギニヨンによって設立された文学組織 IAREV、特に『プロレタリア文学』紙は、ソ連国内への外国トロツキスト、特にブルギニヨン自身の合法的侵入のための条件を作った。」[③24]

このような「自白」をもとに、トロツキストというキーワードを駆使してエスペラント界の粛清が進行した。1937年10月14日「犯罪者トロツキスト」の罪を宣告され、翌日銃殺された。「自白」者を責めるのは正しくない。非難すべきはそのような「自白」に署名させた権力である。

また「トロツキスト」という理由での弾圧のほかに、ソ連国内の言語政策面でのエスペラントの位置付けがあった。その頃ロシア語はソ連邦諸国内の共通語であり、国際語であった。エスペラントがそのロシア語の地位を脅かすことを、当局は危惧した。SEU 中央委員会は次のようにエスペラントを位置付け、それまでのドレーゼンのエスペラント観を否定した。

「エスペラント語の宣伝活動は、共産主義への移行期すなわち多言語の存在する期間における国際的補助言語として行われねばならないのであって、世界語、全世界語、普遍語として、また未来の共産主義の統一言語として、いわんや決して諸民族諸語を代替するかその対立物として行われてはならない。代替ではなく、その逆に諸言語習得への準備段階に役だちうるものとして宣伝されねばならない。」[1937年3月24日中央委員会議事第5]

当時、「全世界プロレタリア革命」、「プロレタリアの統一言語」、というトロツキー主義を思わせるエスペラントの位置付けが現れてきた。ドレーゼンのエスペラント語論はそれに近いと疑われた。1937年9月11日中央委員会決議で、「ドレーゼンの著書配布禁止」が出された。同じ日の決議では、「スパイ共、人民の敵、は破壊的スパイ活動のためにあらゆる道を利用して、自分の目的のために国際文通をいとも簡単に利用する」という文句が盛り込まれ、「エスペラント組織や個人の国際文通は、ただ集団的にのみ、調査された住所で、党・組合組織の参加と指導のもとに行われなければならない」ことが確認された。[①92-93]

1920年代の末ごろから、文通は「集団的」になされるように指導されつづけてきたが、1937年ではそれが徹底された。「トロツキー・ジノヴィエフ裁判」に関連して、国際文通規制が教化されていった。1937-38年、ミハルスキイ、ドレーゼン、ネクラソフ、ヴァランキンをはじめほとんどのエスペランチスト活動家らは逮捕され、銃殺、又は流刑に処せられた。ドレーゼンは、「エスペランチスト達による反ソトロツキストテロ活動組織の創設と指導の罪、その組織構成内部での後方攪乱テロ作業実施の罪、及びドイツを利するスパイ

行為の罪」により 1937 年 10 月 27 日ソ連軍事最高法廷で銃殺刑を宣告され、執行された。

[②27]

ヴァランキンは、「1938 年 10 月 3 日、ソ連軍事最高法廷により、ファシストスパイ組織『合同センター（ソユーズヌイツェントル）』への参加の罪、その組織はエスペランチスト達の組織の形でソ連内に存在し、全ソ共産党とソ連政府指導者に対するスパイ、攪乱行為、テロ活動によってソ連政府を転覆せんとする目的を掲げていた。財産没収の上銃殺刑宣告。刑は執行された。」[②29]

罪名の画一性とそらぞらしさが、当時の弾圧の狂気を物語る。1938 年のブハーリン死刑は第三次トロツキスト裁判ともいわれ、外国の諜報機関が「右派＝トロツキー派ブロック」という陰謀団をつくり、ボリシェヴィキ政権打倒と資本主義再建を目標とした、などの罪が着せられた。

1936 年 5 月のフランス選挙での人民戦線の勝利、6 月のストライキ暴動、翌月からのスペイン内乱など一連の人民戦線の動き、はトロツキー信奉者にとって革命戦争の機会であった、という国外の情勢もこの大粛清に拍車をかけた。スペイン内乱でエスペランチストが活躍したことも、スターリンにはエスペランチスト＝トロツキスト、という疑いの念が起こってきた、と私は推測する。ソ連政府はスペイン共和党右翼を支持し、カタロニア地方で優勢であったアナキスト、サンヂカリスト、トロツキストの諸グループを弾圧するよう要求した。スペイン内乱参加者でソ連に帰国または入国した者はその後粛清される運命となった。

根底に「ソ連愛国主義」「一国社会主義」の情念があったので、「国際主義」はスパイ行為と等しいとみなされた。世界革命を標榜するトロツキー信奉者、さらにはコミンテルンまでも粛清の標的になり、ドイツ共産党員、ポーランド、ハンガリーの共産党員（スペイン内乱に参加した有名なベラ・クンなど）も粛清の犠牲となった。

1937 年はプーシキン没後 100 周年であった。ネクラーフらの『青銅の騎士』エスペラント訳が入った記念号の広告が栗栖継さんから戴いた本の中にはさんである。出版はブダペストの「文学界」出版、とある。しかし、これが出版されたかどうか？『戦争と平和』もミハルスキイ訳で出る予定だった。ソ連の世界語者たちの貴重な仕事は粛清で散逸してしまったものも少なくない。本当に口惜しい。

本稿は偶然が重なって書かれた。栗栖継先生にネクラーフ訳『エヴゲーニイ・オネーギン』を戴いた。先生が事情で、引越しされるにあたって僕に残して下さった。またアムステルダムで僕の『オネーギンの世界語訳』の論文を誉めてくださったデトレフ・ブランケさんが僕に自著をプレゼントしてくれた。ロシア語版エスペラント運動史の最新資料である。ウルリッヒ・リンスさんの『危険な言語』⑤があるので、それに書かれていない部分を付加すればいい。堀泰雄さんが、関東連盟合宿での報告の機会を与えて下さった。大きな問題なので、まだまだ、未公開のアーカイブ史料にあたるべきである。これは後の課題としたい。

参考文献

- 1) Олег Красников, История союза эсперантистов советских республик; Детлев Бланке, История рабочего эсперанто-движения. Москва, Изд-во «Импэто», 2008.
- 2) Nikolao Stepanov, La vivo kaj morto de Vladimir Varankin (1902-1938). Eldonejo “Fenikso”, 1990.
- 3) Eŭgeno Miĥalski, Plena Poemaro (1917-1937). Redaktis William Auld kun enkonduko de Krys Ungar. Antwerpen, “Flandra Esperanto-Ligo”, 1994.
- 4) A. S. Puŝkin, Eŭgeno Onegin: Romano en versoj. Tradukis kaj komentis N. V. Nekrasov. Paris-Leipzig-Moskva, Sennacieca Asocio Tutmonda, 1931.
- 5) Ulrich Lins, La danĝera lingvo: Studo pri la persekutoj kontraŭ Esperanto. Eldonejo “Progreso”, 1990.
- 6) ウルリッヒ・リンス著・栗栖継訳、『危険な言語』－迫害のなかのエスペラント、岩波新書、1975年。